

# 全国交流「火山と原発」の補遺・補足

立石雅昭 (原住連代表委員)

十一月下旬から十二月中旬にかけて、鹿児島県桜島火山が活発に活動し、爆発的噴火を繰り返しています。十三日も爆発がありました。火山警戒レベルは、3に引き上げられています。

一九一三年六月末の日置地震を前兆とし、翌一四年(大正三年)一月に始まった桜島大正噴火は死者五十八名を出し、二十世紀における国内最大の火山災害となりました。今、その規模の大規模噴火が迫っている可能性が指摘されています。

この「桜島の大規模噴火を考える」特集が、「自然災害科学」(二〇一九年三十八巻三号)で生まれ、鹿児島大学名誉教授の小林哲夫先生も、その長年の調査・研究を踏まえて寄稿されています。

十月二十七日、鹿児島で開催した原発問題全国交流集會では、小林哲夫鹿児島大名譽教授を招いて、九州中南部の五大カルデラの火山活動に関する実相と予測研究の現状を学びました。小林先生の報告レジュメは原住連のHP (http://genjatsui.com/) で見ることが出来ます。交流集會では、小林先生の報告を受け、私の方で、「火山と原発」と題す

る報告をさせて頂きました(その報告要旨も原住連HPから見ることが出来ます)が、ここではその補足をを行います。

## ①火山活動は数十万年単位ではほぼ同じ場所を繰り返す

プレート配置が大きく換わらない限り、日本列島における火山活動は、カルデラ型の破局的火山爆発を含めてほぼ現在と同じ場所で発生します。今のところ、プレートの配置とその動き(沈み込む方向や速度)に大きな変化が認められない以上、火山の位置が大きく変化することはありませぬ。新たな火口や側噴火、割れ目噴火など、これまでと異なる場所で噴火することはあっても、大きくは従来の火山体の領域での活動です。

## ②万全の火山防災体制の構築と住民周知が必要

大正噴火規模の大噴火が迫っていると考えられる桜島は国内でも最高/最新の観測/予測システムが構築されています。火山災害には噴石、溶岩流、火砕流、泥流、火山灰、火山性岩など各種の現象がありますが、同時期に起こりうる地震や津波への注意も必要

です。すでに、県都鹿児島市と錦江湾周辺市町村では、火山ハザードマップをはじめ、火山防災計画が策定されていますが、実効性のある防災計画は、絶えず見直す(例えば、鹿児島市のハザードマップは平成二十二年発行)とともに、訓練などを通して住民に周知することが重要で

## ③始良カルデラを形成した規模の破局的巨大噴火は川内原発を襲いつつ

鹿児島湾奥の錦江湾は約三万二千九千年前に発生した超巨大噴火によってできたカルデラであり、この爆発で噴出した入戸火砕流は広く南九州を覆って、シラス台地を造っています。先号にも報告したようにこの火砕流は川内原発にも達しています。桜島はこのカルデラ噴火の後、その外

縁部分に噴出した火山です。

## ④カルデラ噴火は制御できません

しかし、小林先生たちの長年にわたる調査・研究で、カルデラ噴火の数百年/千年前には前兆噴火があることが明らかにされてきました。その前兆活動をとらえることが重要です。この前兆活動やカルデラ噴火を起こすマグマは、しばしば噴火する火山のマグマとは科学的成分を異にしています。

現在のところ、こうした前兆現象は認められないので、少なくとも百年はカルデラ噴火が起こるとは考えられませぬ。しかし、通常の火山活動とは異なるマグマの集積過程や、前兆噴火・カルデラ噴火に至る過程など、カルデラ噴火の予測をより科学的に精密にしていく基礎的研究が求め

られています。

## ◇◇

なお、九州電力は、④の予測などをもとに、「原発の運用期間中に破局的噴火が起こる可能性は低い」としていますが、この「運用期間中」とはなにをさしているのでしょうか。一般には四十年あるいは六十年という運転期間を指していると考えられますが、高レベル放射性廃棄物の処理場の建設が全く見通せない現在、「核のゴミ」は原発敷地内に留め置かれざるをえません。この点を曖昧にしたまま、「運用期間中には破局的噴火が起こる可能性は低い」とする評価は誤りです。また、全国交流集會でも触れた、原発の安全性に関わる火山活動の評価指針となる「火山影響評価ガイド」の改定が十二月十八日、規制委員会です承されました。

## 原発ノ一なら「自家発電で生活しろ」「自宅から出るな」

業誌誌「ENERGY for the FUTURE」で、「BWRの再稼働」と題し、東海第二原発を抱える茨城県東海村の山田修村長と柏崎刈羽原発を抱える新潟県柏崎市長の品田宏夫市長が対談。山田村長は「BWRについてもしっかりと再稼働していく必要がある」と語

## 山田東海村長が暴言 —業界誌対談— 「再稼働は必要」

山田村長は誌上で「新規制基準ができていない安全対策が二重三重にできているのですから論理的に

「(社会インフラの電気を使うこと)になるので自宅から一歩も出ていけない」と暴言を吐くに至っては村長としての資格が問われる。

「BWR」とは沸騰水型軽水炉のこと。事故を起こした福島第一原発はこの型。東海第一原発も柏

崎刈羽原発も同型。東海第二原発は運転開始四十年を超えた二十年延長運転の再稼働の容認ともとれる発言に地元住民の批判の声が高まっている。

考えれば：同じような事故はまず起こらない」と発言、避難計画の美効性が懸念されているとき、立地自治体の首長が新たな「安全神話」の先頭に立つとなどりえない話。原発を必要ないとする住民について「すべての外部電源を遮断して自家発電だけで生活してもらわなければいけない」